



## 第2回文化遺産学交流会

著者	影山 陽子
雑誌名	NOCHS Occasional paper
巻	10
ページ	23-23
発行年	2010-01-10
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/3017">http://hdl.handle.net/10112/3017</a>

## 第2回文化遺産学交流会

2009年3月7日(土)

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター

2009年3月7日(土)、第1回に引き続き、当センターに於いて第2回文化遺産学交流会「神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターと関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター」を開催した。今回は、当センターと同じ関西圏内で、地域の歴史遺産の活用に取り組んでいる神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの方がたにお越しいただいた。

神戸大学は、教育と研究に並ぶ第三の使命として社会との連携および協力をより重視しており、人文学研究科、医学部保健学科、農学研究科にそれぞれ地域連携センターを設立している。その中でも、人文学研究科地域連携センター(以下、地域連携センター)は、文学部の日本史専攻の教員により2002年に設立され、主に歴史文化を中心に活動しているセンターである。特に地域の歴史的環境を活かしたまちづくりの援助に力を入れており、小野市や伊丹市など兵庫県内のさまざまな市との連携事業を行なっている。また、阪神・淡路大震災で被災した史料の保存・活用も行なっている。地方自治体や地域の市民団体を積極的に支援し、またそれらを学生が知識や技能を社会で実践的に深める場ともすることで、双方向的な事業となっている。

交流会当日、地域連携センターからは、事業責任者である奥村弘氏、県内自治体等との連携事業全体および地域連携協議会を担当している坂江渉氏、阪神地域を中心とする文献資料所在確認調査・神戸市淡河における連携事業・神戸市灘区との連携事業などを担当する木村修二氏、朝来市生野町との連携事業・たつの市新宮町との連携事業を担当する河野未央氏、阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する事業を担当する佐々木和子氏、歴史資料ネットワーク事務局長をつとめ、被災した歴史資料の救出・修復活動にも従事している松下正和氏、尼崎市富松における連携事業・神戸市淡河における連携事業・新修神戸市史の編纂事業を担当する村井良介氏らに来ていただいた。

交流会では、奥村氏と藪田貫(センター総括プロジェクトリーダー)から、それぞれの活動理念や地域連携における大学の役割などの報告があった後、参加者全員を交えての議論が行なわれた。続いて、河野氏によるワークショップ「水損史料の応急処置実習」が行なわれ、水損史料を模した、水に浸された和綴じの冊子から水分を取る作業を体験した。交流会後半では、坂江氏と、当センターの内田吉哉(特別任用研究員)から、それぞれのセンターの具体的な活動内容が紹介された。また、関西大学環境都市工学部の岡絵理子氏に、現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム(現代GP)「農山村集落との交流型定住による故郷作り—持続的に“関わり続けるという定住のカタチ”による21世紀のふるさとづくり—」として2007年から行なわれている、兵庫県丹波市青垣町での活動についてご報告いただいた。

地域連携センターと当センターは、地域連携に力を入れていること、携わるスタッフの構成など類似点が多く、そういった面から議論を行なう予定であった。しかし会が始まってみると、二つのセンターには文化遺産に対するスタンスや発想などに多くの相違点があることが分かり、類似点・相違点の双方の観点から、議論を深めることが出来た。文化遺産は地域に結びついているものであり、多種多様な地域それぞれに合ったアプローチが重要であるということを実感する会であった。

(影山 陽子)